

NEWS

号外

香川県立ミュージアム
ニュース
2024

瀬戸内海歴史民俗資料館 開館50周年記念特集号

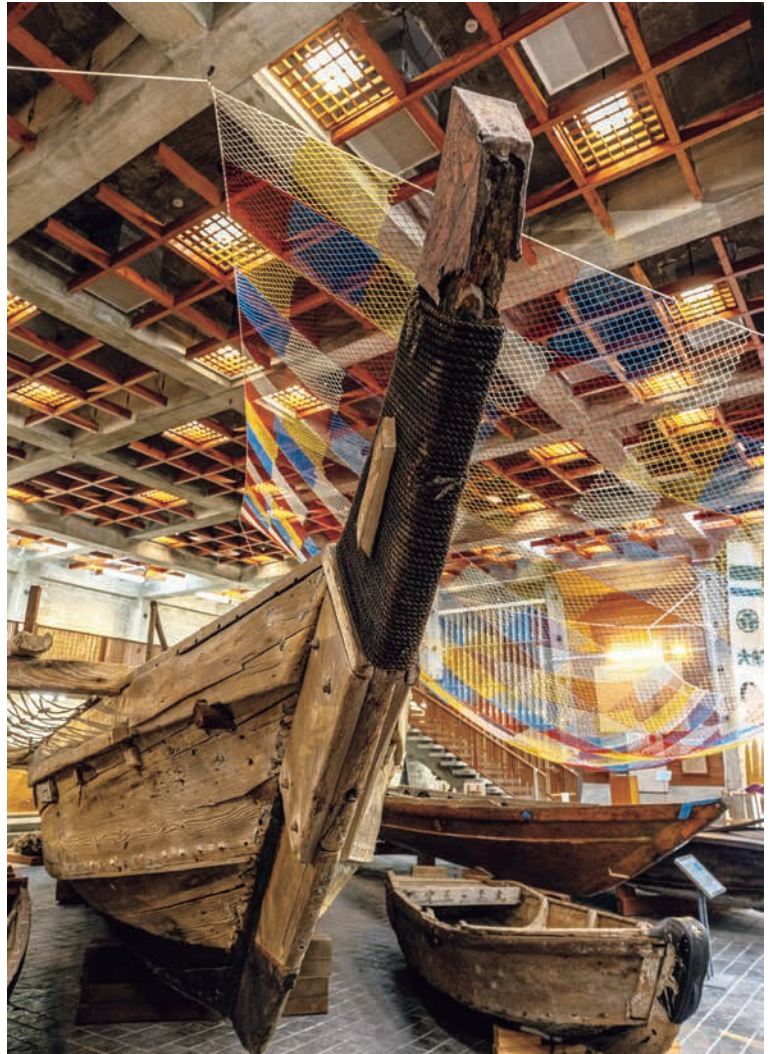
“れきみん”の現在、そして未来へ。



1



2



3

Contents

I 館のあゆみと開館50周年記念事業	2
II つながる「場」としてのれきみん	4
建築から広がる：れきみん建築の新しい可能性を探して	4
モノから広がる：資料の収集と活用について	5
ヒトから広がる：れきみんで学び合う！ — ボランティアの挑戦と「学び」の充実に向けて —	6
調査・地域から広がる：現代社会に向き合う	7
瀬戸内海歴史民俗資料館50年の歩み	8

1 瀬戸内海歴史民俗資料館の外観 外壁には基礎工事の際にこの場所から出てきた安山岩を積み上げる。
2 玄関ロビーから見る中庭 展示室に囲まれた中庭には五色台の自然がそのまま残されている。
3 第1展示室の木造船と500人以上が参加して編んだ《そらあみ》 【作家：五十嵐靖晃、撮影：宮脇慎太郎】

瀬戸内海歴史民俗資料館は、昭和48年（1973）11月3日に開館し、50周年を迎えました。備讃瀬戸の海を望む山上で、瀬戸内の11府県を対象とする広域資料館として活動を続け、各地から収集した資料のうち約6,000点が国の重要有形民俗文化財に指定されています。本誌では、近年の活動や開館50周年事業などを中心に取り上げながら“れきみん”の現在を紹介するとともに、これからの活動について考えます。



特集1 館のあゆみと開館50周年記念事業

五色台に歴史民俗資料館を建てる

当館は、瀬戸内海国立公園の中にある五色台を「人と自然との豊かな対話」を生む学びの場にするという昭和40年代の香川県の開発計画に基づき、山上に点在する教育系施設の一つとして建設されました。ちょうど、国立歴史民俗博物館の建設計画に連動して各地で地方歴史民俗資料館の整備が進められていた時期でもあり、その中で当館は瀬戸内海沿岸地域を対象とする広域資料館という位置付けで文化庁の補助金を受けて開館しました。

当時は、昭和45年（1970）から始まった香川県独自の教育プログラム「五色台教育」が全国から注目を集め、年間1万人を超える県下の子どもたちが宿泊学習のため五色台を訪れていました。当館がその一翼を担う学びの場としてスタートを切ったことは、これからの活動を考えていくうえでも大事なポイントになるのではないかと考えています。

館のあゆみと役割の変化

開館した当初、当館には歴史・民俗・考古の3部門があり、中でも民俗分野が充実しているのが特徴でした。国庫補助による調査事業等にも積極的に取り組み、昭和52年（1977）には「瀬戸内海及び周辺地域の漁撈用具」が重要有形民俗文化財に指定され、同55年に漁撈収蔵庫が完成します。また、平成5年（1993）には「瀬戸内海の船図及び船大工用具」が国指定となり、木造船製作現場の再現など常設展示の更新が行われます。開館25周年頃までは、県立の中核的な資料館として、3つの分野それぞれにおいて調査研究や資料収集、展示などの活動が行われていました。

平成11年（1999）に人文系総合博物館として香川県歴史博物館（現 香川県立ミュージアム）が開館すると、当館は瀬戸内の広域を対象とする民俗分野の専門館という位置付けになります。これによって3部門制は廃止され、「瀬戸内海のくらしと文化」というテーマのもと、常設部分の展示替えが行われました。開館30周年を迎えたのは、ちょうどこの頃です。平成19年（2007）には香川県歴史博物館（翌年、香川県立ミュージアムに改称）の分館となります。この頃から、瀬戸内国際芸術祭の開始（2010年）などを機に瀬戸内の島々の歴史やくらしなどへの関心が高まり、建築の人気とも重なって、若い世代の人たちの来館が徐々に増えてきました。

開館40周年を迎えると、平成27年（2015）に「西日本の背負運搬具」が国の文化財指定を受け、翌年には隣接する県自然科学館の閉館によって海底地質標本やクジラの骨格標本などの資料が移管されます。これに伴って常設展示は自然分野も視野に入れ、「瀬戸内の里海文化」、「香川の里山文化」という二つのテーマで、広域資料館と地域資料館の視点に基づく構成へと変化し、現在に至っています。

そして、令和3年（2021）、第1展示室の中2階に瀬戸内ギャラリーを開設しました。瀬戸内、くらし、自然などのテーマで、常設展示の内容とも呼応させながら総合的・分野横断的な展示を行うとともに、外部と連携して異なる分野の人たちが交わることで新たな化学反応が起きることを期待した取り組みです。開館50周年記念事業では、この空間を積極的に使いながら、さまざまな展示やイベントなどを行いました。



建設中の当館（昭和47年頃）



開館当初の第1展示室（高橋克夫氏撮影）



完成した漁撈収蔵庫（昭和55年）



歴民の灯台（平成15年）
30周年記念で旧高松港灯台を移設



屋上展望台での学び(ふるさと体験ツアー)



夜の瀬戸内海(ナイトミュージアム)



木造船の前で《そらあみ》を編む(そらあみ)

開館50周年記念事業

今回の記念事業は、瀬戸内海を望むこの場所と、風土に根ざした建築、そして瀬戸内の各所から集まって来た民俗資料が一体となって歴史を刻んできた当館のあゆみを、さまざまな角度から見つめ直す機会となりました。一緒に取り組んでくださった皆さんに、心から感謝いたします。ここでは、令和5年度に実施した主な事業をご紹介します。

展示

テーマ展【第9・10展示室】

- 開館50周年歴史ボランティア企画 7/15(土) - 9/3(日)
我が家の思い出モノ語り ―モノ・コト・ヒトが紡ぐ50年―
- 開館50周年記念展 10/21(土) - 11/26(日)
歴史コレクション展Ⅰ 瀬戸内を集める
- 開館50周年記念展 2024.1/13(土) - 3/24(日)
歴史コレクション展Ⅱ 家と人のコトを集める

瀬戸内ギャラリー企画展【瀬戸内ギャラリー】

- れきみんで建築を楽しもう 7/22(土) - 9/3(日)
共催:(一社)香川県建築士会高松支部青年部会
- 香川県・東京藝術大学連携事業 瀬戸内分校プロジェクト
海は人を愛する「くらしとあみ」展 10/27(土) - 11/26(日)

開館50周年記念事業「れきみんで瀬戸内海を学ぶ」

○連続セミナー「5つの視点から瀬戸内を見る」

4/22(土)
「瀬戸内海の成り立ちと海底地質」

長谷川修一(香川大学名誉教授)

5/14(日)
「底引き網漁師に聞く」

西谷 明(瀬戸内漁業協同組合副組合長)

5/27(土)「海の安全を守る」

高松海上保安部職員

6/11(日)「海ごみ 県境を越えて」

山陽学園中学校・高等学校地歴部

6/24(土)「瀬戸内をアーカイブする」

下道基行(瀬戸内「」資料館館長)

村山 淳((一社)トピカ代表理事)

○そらあみ-瀬戸内海歴史民俗資料館-アートで文化遺産を編みひらく アーティストの五十嵐靖晃さんによるアートプロジェクト。



ワークショップ

- 6/13(火)・22(木) 小学校出前授業
- 6/29(木)・30(金) 小学校ワークショップ
- 7/22(土)・23(日) ワークショップ
歴史で《そらあみ》を編む
- 8/3(木) ふるさと体験ツアー
- 7/22(土) - 9/3(日) 《そらあみ》制作
- 10/14(土) - 11/26(日) 《そらあみ》展示



第2回セミナー

○れきみんナイトミュージアム

一夜の海とあかり

10/28(土)・10/29(日)

夜の資料館で船舶灯などの展示を行ったほか、令和5年に寄贈された灯台フレネルレンズの点灯と屋上展望台での「夜の海」教室(高松海上保安部協力)、展示室を使った光と音の歴史解説ツアーや工作教室(香川大学創造工学部協力)、ウミホタル鑑賞会(香川県水産試験場協力)などを実施しました。



灯台が照らす夜の景観



光と音の歴史解説ツアー

○開館50周年記念シンポジウム

《海》と《日常》の間をつなぐ

―瀬戸内海歴史民俗資料館の50年とこれから―
11/3(金・祝)

会場:香川県立ミュージアム

神野善治(民俗学者・武蔵野美術大学名誉教授)

佐藤 卓(グラフィックデザイナー)



パネルディスカッション

民俗学やデザインの専門家をお招きし、さまざまなかたちで瀬戸内海とつながる沿岸地域と、そこに住む人々の暮らしに改めて目を向け、その間をつなぐ「場」としての当館のこれからのあり方について考えました。

*「れきみんで瀬戸内海を学ぶ」の4事業は船の科学館「海の学びミュージアムサポート」の助成を受けて実施。



これからのれきみん

近年、博物館法が改正され、これからの博物館に求められる役割がより複雑化するなかで、モノやコトとヒトをつなぎ、分かち合うことの重要性が唱えられています。少子高齢化や新型コロナウイルスの影響を受ける地域社会の中で民俗文化が変容しつつある今、歴史民俗資料館が担うべき役割は増えていると考えます。

50周年を迎えた当館は、瀬戸内の広域資料館として、また県立の地域資料館として改めて有形・無形の民俗資料に向き合う活動に取り組むとともに、ギャラリーや建築を活用して、さまざまな人が交流し、異なる分野の視点も重ねながら今の地域文化を捉え、考えていく場になりたいと思います。

(瀬戸内海歴史民俗資料館館長 松岡 明子)

これからの博物館には、従来の調査研究や展示、収集等の機能に加えて、人や地域、資料、自然、異なる世代などさまざまなものをつなぐ役割が期待されています。50周年を迎えた当館のこれからの活動は、どのように広がり、つながっていくのでしょうか。

1 建築から広がる

れきみん建築の新しい可能性を探して

建築に惹かれる来館者たち

近年、当館の建築を見るために、県外から多くの来館者が訪れるようになりました。設計者は香川県庁建築課の職員であった山本忠司（1923～1998）です。当館は山本の代表作とされ、建築工事の際に生じた多量の安山岩を積み上げた外壁は、優れた建築意匠であるとともに、周辺の景観とよくなじんでいます。昭和50年（1975）に日本建築学会賞を受賞し、平成25年（2013）にはDOCOMOMO Japanによる「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」に選出されるなど、瀬戸内海の自然と調和するモダニズム建築として知られています。

当館では、近年、建築に魅力を感じて来館される方々が増えてきています。2000年代からの全国的な建築ブームの中、建築ファンの認知度が高まったことがその背景にあると考えられます。

れきみんにとっての2023年と連携企画の試み

令和5年（2023）は当館の開館50周年であり、建築に関わる展示やイベントも関係団体と協働して開催しました。

（一社）香川県建築士会高松支部青年部会との連携企画では、瀬戸内ギャラリー企画展「れきみんで建築を楽しもう」を開催し、館内スタンプラリーなども行って当館の建築的な見どころを紹介したほか、夕暮れから夜の建築の美しさを楽しむ「ライトアップれきみん」を開催しました。これらの企画では、専門家

たちが掘り起こした建築の魅力を素材として展示やイベントに練り上げ、一般の方々に広く楽しんでいただけるように試みしました。また、令和5年は設計者である山本忠司の生誕100周年でもあり、（公社）日本建築家協会四国支部香川地域会と連携し、山本忠司の仕事や当館の設計秘話を紹介する座談会と館内見学も行いました。

風土に根ざした建築が生み出す 心地よい空間

建築がキーポイントとなった諸企画のうち、「ライトアップれきみん」で特に印象的なシーンがありました。暮れなずんでいく庭でシャボン玉遊びに興じる子どもたち。石積みの建物のそばで虹色に輝きながら上っていくシャボン玉。その傍らで、マフィンをはおぱり、談笑しながら夕日を眺めている大人たち。そんな来館者たちの姿を見て、当館の魅力は五色台から望む瀬戸内海や、風土に根ざした建築、瀬戸内地域の人々が使っていた民俗資料などが一体となって生み出すものなのではないかと感じました。

50周年を迎えた当館は、また新たな一歩を踏みだします。今回気付いた建築の魅力に留まらず、さらに新しい可能性を探し、磨き上げることにより、民俗・歴史や建築に興味をもつ方々だけでなく、ますます幅広い方々が訪れ、交流し、人・地域・未知とつながる居心地のよい空間をつくっていきたいと考えています。

（主任文化財専門員兼主任専門学芸員 長井 博志）



明かりに照らされた館内（ライトアップれきみん）



キッチンカーによる期間限定カフェで和む来館者（ライトアップれきみん）

2 モノから広がる

資料の収集と活用について

開館から30周年まで

当館は昭和48年（1973）に瀬戸内海全域を対象とする広域資料館として開館しましたが、この時、展示の重要な柱として漁撈用具を各地から収集しました。現在、第1展示室の中央にあるタイシバリ網船もその一つで、昭和52年（1977）には「瀬戸内海及び周辺地域の漁撈用具」（2,843点）が国の重要有形民俗文化財に指定されました。また、この指定品の中にあつた船の「板図」の重要性に着目したのを契機に船大工用具の収集が行われ、平成5年（1993）には「瀬戸内海の船図及び船大工用具」（2,813点）が国の指定を受け、その後は「櫓屋」についても継続的な収集調査が行われました。これらの活動と並行して、当館は設立時より地域資料館としての役割も担っており、農耕儀礼を中心に郷土に密着した調査や資料の収集も行われました。

30周年から50周年まで

30周年以降で特筆すべき出来事は、平成27年（2015）に「西日本の背負運搬具コレクション」（310点）が国の指定を受けたことです。負子は薪や収穫物を背中に負う道具で、西日本には木杵から後ろへ棒（爪）を出して荷を固定するものが多く分布し、これは朝鮮半島から伝えられた爪のある負子であるチゲの影響であることなどが明らかになりました。

また、昭和30～40年代にJETRO（日本貿易振興会）が収集した欧米の優秀商品のうち、現在の県産業技術センターに展示されていた資料が当館に収蔵されました。これらは、貿易拡大に向けて産業意匠を改善するために収集されたもので、香川県の産業デザインにも影響を与えた貴重な資料です。



珐瑯鉄器 JETRO
収集海外優秀商品



セイタ（徳島県木屋平村）
椎茸職人が朝鮮のチゲに似た負子
を豊後から伝えた。

地域資料館としては、「櫓屋」と呼ばれる農具大工の調査や収集が系統的に行われました。さらにまた、近年は「家終い」による資料寄贈が増え、個人やイエの歴史、生活誌などに重点を置いた調査、収集も必要になってきています。

資料の活用

このように、当館は50年の歴史の中で、多様な領域に関わるモノを収集し、その諸相について調査研究を行ってきました。その対象とする領域の多様性は、瀬戸内、郷土、イエ、個人などさまざまな次元を媒介するものとしてモノを位置づけ活用することを可能にすると考えます。

近年は、瀬戸内ギャラリーの開設や開館50周年の記念事業などで、さまざまなジャンルとのコラボレーションも実施しています。昨年夏には、タイシバリ網船の前でアーティストの五十嵐晴晃氏の指導のもと、来館者とともに《そらあみ》を編むイベントを行いました。収蔵するアミバリなども展示し、アートの要素を組み合わせることで、これまで民俗資料として展示されたモノに新たな光を当てることができました。



タイシバリ網船の前で《そらあみ》を編む来館者

当館は多様な領域をつなぐ媒体としてのモノを収集していることから、文化でさまざまな人と地域をつなぐハブとしての役割をそのモノから引き出すことができると考えます。今後も展示されたモノの多様な働きを引き出すことで、人々を惹きつけ親しまれる施設となるような企画を行っていきたいと考えます。

（専門職員 真鍋 篤行）

3 ヒトから広がる

れきみんで学び合う！

— ボランティアの挑戦と「学び」の充実に向けて —

れきみんボランティアの活動

瀬戸内海歴史民俗資料館では、現在40名以上のボランティアが活動を行っています。職員とともに資料整理をしたり、近隣の地域にフィールドワークに出かけたりするほか、イベント補助や展示案内など活動内容は多岐にわたります。平成24～27年（2012～2015）には、県内に唯一残る製粉水車場高原水車の^{しがい}悉皆調査を職員とともにに行い、水車場の保存並びに国登録有形民俗文化財化に貢献するなど、活動の成果は調査研究や展示などにも生かされています。

開館50周年とボランティアたちの挑戦

開館50周年を迎えた令和5年（2023）には、これまでの活動に加え、れきみんボランティアもさまざまな企画に挑みました。

テーマ展「我が家の思い出モノ語り — モノ・コト・ヒトが紡ぐ50年 —」は、この50年間の社会や暮らしの変化を身近な生活用具を通して見つめ直すことをコンセプトに、職員とともに1年間以上かけて準備してきたものです。ボランティアの皆さんの各家庭で使われてきたものを持ち寄り、モノにまつわる思い出を添えて展示を行いました。企画会議を重ね、手探りのなか完成した展示は、生活を豊かにした家電製品や夢中になって遊んだおもちゃ、お気に入りの衣服などが並び、楽しくちょっぴり甘酸っぱい思い出とともに社会の流行や家族との思い出をふり返るものとなりました。会期中には解説会も行い、来館者と話を弾ませました。



テーマ展作業風景

アートプロジェクト《そらあみ》では、網を編む作業をはじめ、小学生や一般の方を対象としたワークショップなどでも、アーティストの五十嵐靖晃さんのサポーターとして活躍しました。単純そうに見えて奥が深い、網を編む技術。初めて網に触れる参加

者にその技を伝えるため、練習をくり返しました。制作期間中は網を編むだけでなく、作業の方法を工夫したり来館者に分かりやすく編み方を教えたりするなど、それぞれの持ち味を生かしながら、《そらあみ》の完成に向けて取り組みました。

れきみんの「立て役者」

当館がさまざまな事業を行う上で、ボランティアはなくてはならない重要な存在 — 「立て役者」です。一方、ここ数年はコロナ禍での行動制限等もあり、ボランティアが企画を練ったり、来館者に直接触れ合ったりする機会は、そう多くはありませんでした。今回の活動を通して、これまでとは一味違った達成感を味わうとともに、ボランティア同士の絆も深まったように感じます。これらの活動で得られた経験を糧に、新たな挑戦を続けていきたいと思えます。

瀬戸内を舞台に未来を考える場を目指して

開館以降、当館は五色台学習などを通じて地域の歴史や暮らしを子どもたちに伝える役割を果たしてきました。現在では遠足や校外学習を通じて、学校教育とも連携を図り、海洋ごみ問題やSDGsなど現代的な課題の学習にも取り組み始めています。今年度実施した小学校の出前授業では、漁網について学習するなかで、網にかかった海ごみにも触れる機会を作り、問題解決に向けて私たちにできることについて考えました。これからも、瀬戸内を舞台に過去や現在を学びつつ、未来についても考える場でありたいと思えます。

（専門職員 井奥 亮太）



出前授業での海ごみ学習

4 調査・地域から広がる

現代社会に向き合う

災害に備える有形民俗資料確認調査

本年1月1日、能登半島地震が発生しました。香川県では平成23年(2011)の東日本大震災後に策定した第2期香川県文化芸術振興計画(25~29年度)で、南海・東南海地震に備えた文化財レスキュー事業を行いました。当館は県内の有形民俗資料収蔵施設約60カ所の確認調査やハザードマップとの照合を行うなど、発災時対応のための基礎データを集め、県文化財保護部局などと情報共有しました。しかし、確認調査から10年余が経過し、個人コレクションの休眠化や小学校の統廃合による異動が生じており、また今般の地震をふまえて更新調査の必要性を痛感しています。

地域の伝統文化・技術等の調査記録・発信事業

令和2年(2020)からのコロナ禍は地域社会の祭り・行事をはじめ、冠婚葬祭など民俗生活全般に大きな影響を与えました。当館では独自にコロナ禍影響調査を実施し、地域社会の祭り・行事や民俗芸能が縮小・休止された状況、工夫して開催したようすを映像や写真で記録しました。

令和5年(2023)からは、地域の伝統文化・技術等の調査記録・発信事業を実施しています。少子高齢化・限界集落化の中、かつて当館が実施した島嶼部民俗調査や諸職調査、民俗芸能調査などの対象地域や職人、祭り・民俗芸能などの現況調査を実施するとともに、地域や保存団体の課題や工夫を共有し、今後の取り組みの参考になるよう、展示やトークイベントを実施していきます。



瀬戸内ギャラリー企画展「いにしによる」(R4.10/1~12/18)
中山間地の空き家のリノベーションなどを行っている地域おこし団体との共催展示
(空き家に残されていた生活用具の展示)

瀬戸内ギャラリーの開設

令和3年(2021)3月、第一展示室中2階に「瀬戸内ギャラリー」を開設して企画展示を開催することにしました。分館化以降、民俗専門館になった当館ですが、民俗分野だけで「瀬戸内」を語ることはできません。現在まで12回にわたり、当館自主企画の他、アーティスト・職人・自然分野の研究団体・地域おこし法人などの外部の個人・諸団体との協働作業によって瀬戸内や暮らしをテーマに開催しています。今後もこのギャラリーでの企画展を通じて外部連携を促進し、瀬戸内文化のモノ・ヒト・コトの接着剤、結節点、発信地となるよう努めていきたいと考えています。

「瀬戸内法」施行50周年・開館50周年をふまえて

当館は昭和48年(1973)に開館しましたが、この年はいわゆる「瀬戸内法」が施行された年でもありました。当時の瀬戸内海の水質汚染は著しく「死の海」とも呼ばれていました。歴民の開館に寄せて「資料館だよりNo.1」に寄稿された文化庁関係者はその結びに次のような一文を記しています。

単に過去を振り返るだけに止まらず、内海のみならず平和を取戻す未来図に、この資料館が大きな示唆を与える存在になることも期待したい (田原久「地方歴史民俗資料館の意義」1975.3.31)

今、地域社会は少子高齢化、限界集落化の中で、祭りや民俗芸能等の存続が危ぶまれています。また、「家終い」に伴う資料寄贈の照会も増加しています。急速に変化する現代社会において歴民は「単に過去を振り返る施設」というだけでなく、「未来への灯台」となる施設となるため、開館50周年を機に、開館当初に期待された施設像や役割に今一度立ち戻り今後の活動を行っていく必要があると考えています。

(専門職員 田井 静明)



「家終い」に伴う資料収蔵調査

瀬戸内海歴史民俗資料館50年の歩み

広域資料館として開館

1973 昭和48年

11月3日開館披露式が行われる



1977 昭和52年

「瀬戸内海及び周辺地域の漁撈用具」(2,843点)が国の重要有形民俗文化財に指定される



第1展示室に搬入される
タインバリアミ真網船
(全長15.2m)

1977

「瀬戸内海及び周辺地域の漁撈用具」
国の重要有形民俗文化財に指定

1975

日本建築学会賞受賞

1973

1971 開館
建築工事着工

展示・普及活動の充実

1998 平成10年

開館25周年記念シンポジウム
「邪馬台国の謎を追う」(香川県県民ホール)



讃岐を投馬国の候補地にあげたシンポジウムを開催した。

2014

「西日本の背負運搬具コレクション」国の重要有形民俗文化財に指定

2007

香川県歴史博物館の分館となる

香川県歴史博物館は翌年、香川県立ミュージアムに改称

開館30周年
2003

「歴民の灯台」設置

2001

ボランティア活動が始まる

1998

開館20周年
1993

公共建築百選顕彰

開館20周年
1993

「瀬戸内海の船図及び船大工用具」
国の重要有形民俗文化財に指定

1988

第1回公共建築賞優秀賞受賞

1984

「瀬戸内海歴史民俗資料館紀要」
第1号発刊

1977

1993 平成5年

「瀬戸内海の船図及び船大工用具」(2,813点)が国の重要有形民俗文化財に指定される



国の重要有形民俗文化財指定に合わせて、開館20周年記念特別展「瀬戸内地方の船大工展」が開催された。



開館15周年記念ポスター
(原画 佐藤正義氏)



オイコ

瀬戸内文化の探究

利用・交通案内

瀬戸内海歴史民俗資料館

Seto Inland Sea Folk History Museum
(香川県立ミュージアム分館)

利用案内

開館時間 9:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 月曜日(月曜日が休日の場合は原則として翌火曜日)
年末年始(12月29日~1月3日)など
*詳しくはホームページ等をご確認ください。

観覧料 無料

駐車場 普通乗用車30台収容 大型バス可

〒761-8001 高松市亀水町1412-2(五色台山上)

TEL 087-881-4707 FAX 087-881-4784

<https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/setorekishi/index.html>



- JR高松駅から(生島-大崎ノ鼻経由)/車で約25分(約16km)
- JR坂出駅から(王越-大崎ノ鼻経由)/車で約30分(約20km)
- 徳島方面から/高松自動車道高松槽紙ICより車で約30分(約18km)
- 岡山方面から/瀬戸中央自動車道坂出北ICより車で約30分(約20km)
- 愛媛・高知方面から/高松自動車道坂出ICより車で約35分(約24km)



香川県立ミュージアム

〒760-0030 高松市玉藻町5番5号
TEL.087-822-0002(代表) FAX.087-822-0043
<https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/kmuseum/index.html>



【分館】瀬戸内海歴史民俗資料館

〒761-8001 高松市亀水町1412-2
TEL.087-881-4707 FAX.087-881-4784
<https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/setorekishi/index.html>



【分館】香川県文化会館

〒760-0017 高松市番町1丁目10番39号
TEL.087-831-1806 FAX.087-831-1807
<https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/kmuseum/bunkakaikan/kfvn.html>

